

内なる国際研究への芽吹き

中央大学大学院文学研究科社会学専攻

染谷 莉奈子

先日の「渥美国際交流財団創立 30 周年感謝の集い」で、「内なる国際化」という言葉を聞いた。国際と聞くと、日本では、国外へ出て、さらに知見を深めることを意味することが多いが、「内なる国際化」は、日本国内での国際的な交わりに重きを置いた考え方だそうだ。

国内の大学院に進学してからというもの、英語論文の執筆や、国際学会への参加が問われる時代にあることを、常日頃、意識させられてきた。それは、領域問わず共有するところであろう。他方、国内へ目を向けてみると、多くの留学生や、古今東西、さまざまな国籍の人々がいる。しかし、実際に、こうした交わりにおいて、特別「国際」という言葉があてられることは少ない。たしかに、あえて「内なる国際化」と語られなければならない状況がいまの日本にあることは、その通りだと思った。

さて、わたしが志してきた社会学には「社会を物のように見る」という考え方がある。それは、まず社会学的な手法を確立するためのものもあり、他方で、文系にあるその科学性を問い返すときに使われてきた考え方である。

渥美国際交流財団（以下、渥美財団）には、いわゆる理系の院生がとても多い。わたし自身、渥美財団を通して、理系の学生と交流する前は、「物を対象にした研究を行う研究者」だと単純に思っていた。しかし、渥美財団を通して出会った同期は、ある作業ができるようになったロボットにまるで意思があるかのように話し、友人を紹介するようにキノコの胞子について説明するような人たちだった。それは、物を人のように扱う、もしくは、人と物を相対化し、それぞれの問いを解き明かそうとする姿のように思えた。

また、渥美財団での活動を通して、毎度さまざまな領域で、最終的には同じ方向にある研究課題を抱える研究者に声をかけていただいた。留学生で、現在は静岡の大学で、障がい者への特別支援教育について考え続けている方、数十年前から、経済学の知見から、福祉国家論を展開してきたという渥美財団卒業生、建築の視点から、福祉の「場」づくりについて研究を進める方もいた。たった1年の出会いのなかでも、領域横断したいくつものシンポジウムを立ち上げられそうな方々と交わり、まさに博士論文の執筆過程においてもその射程を大きくしてくれた。

日本ではまだまだ、国籍や言語の違いだけをとって、「国際」と語りがちであるが、本当の「国際」の姿は、そんな大袈裟なことではなく、いまの環境に身をおいたまま、個々の異なりに対して、“ちゃんと交わる”ことを通しても、さまざまな学びを得ることが可能であることを体得した。

思えば、わたしが約 10 年に渡り焦点を当ててきた、知的障がい者の家族の生活世界や、知的障がい

のある方々の生き様も、長きにわたって既存の研究で描かれてきた「施設を出る」や「社会に出る」といった、特別な営みではなく、いまある暮らしに埋め込まれたものであったように思う。博士課程を修了し、新天地での生活が始まるが、これまで通り懸命に、しかし、これからは肩の力を抜いて、ゆっくりと進んでいきたいと思う。